

【報告】

「スタシス・エイドリゲヴィチウス  
イメージ——記憶の表象」展<sup>1</sup>

貞包 和寛

1. はじめに

去る 2019 年、日本・ポーランド国交樹立 100 周年（1919～2019 年）記念事業の一環として、「スタシス・エイドリゲヴィチウス イメージ——記憶の表象」展が武蔵野美術大学にて開催された（挿図 1）。展覧会の情報を以下に示す。

主 催：武蔵野美術大学 美術館・図書館  
会 期：2019 年 9 月 2 日～2019 年 11 月 9 日  
特別協力：駐日ポーランド共和国大使館、ポーランド広報文化センター  
後 援：駐日リトアニア共和国大使館  
監 修：今井良朗（武蔵野美術大学 名誉教授）  
寺山祐策（武蔵野美術大学 視覚伝達デザイン学科主任教授）

本展覧会は、リトアニア出身で 1980 年代よりポーランドに居住するスタシス・エイドリゲヴィチウス氏の作品群（蔵書票、絵画、ポスター、舞台映像など）を展示したものである。

2. スタシス・エイドリゲヴィチウスについて

本展覧会でその作品群が展示されたスタシス・エイドリゲヴィチウス Stasys Eidrigėvičius 氏の略歴について記す。なお、こうした文書で人物を名指す際は姓を用いるのが一般的であるが、氏に関してはほとんどの資料、学術書、報道記事などで名（ファーストネーム）を用いることが習慣化している。筆者もこれに従い、氏に言及する際は「スタシス」とする。

スタシスは 1949 年にリトアニアに生まれた。ヴィリニユスの美術アカデミー在学中より蔵書票（エクス・リブリス）や絵画作品を積極的に発表し、1973 年の卒業後より本格的に芸術家としての活動を開始した。蔵書票作家、絵本の挿絵画家として名を馳せ、その後 1980 年代初頭に活動拠点をポーランドに移した。移住後は、当時ポーランドの芸術界で一大潮流となっていた「ポスターのポーランド派 Polish School of

Posters / Polska szkoła plakatu」の作家らと交わり、自身も多数のポスター作品を世に送り出している。また、リトアニア時代より絵本の挿絵画家としても高い評価を得ており、『ながいおはなのハンス』<sup>2</sup>や『ながぐつをはいたねこ』<sup>3</sup>の挿絵はよく知られている。キャリアの当初は細密画を中心とする創作を行っていたが、パステル画、彫刻、インスタレーション、映像なども手がけ、その表現方法は多岐に渡る。

スタシスの作品はニューヨーク現代美術館やポーランドの各国立美術館のコレクションにも加えられており、国際的に高い評価を得ている。また、1987年にNDA画廊（札幌）で初めて日本での個展を開催し、その後もギンザ・グラフィック・ギャラリー（GGG）やクリエイションギャラリー（銀座）など、日本の有名ギャラリーでも個展を成功させている。新潟の越後妻有アートトリエンナーレ（通称「大地の芸術祭」）や富山の世界ポスタートリエンナーレトヤマなどにも複数回出品しており、特に後者のイベントでは1994年に金賞、2009年に銅賞に輝いている。日本とも縁の深い作家であると言えるだろう。

日本語の書籍としては、GGGから出版された「世界のグラフィックデザインシリーズ」の1冊<sup>4</sup>が比較的入手しやすく、かつスタシスの作品群を包括的に論じて分かりやすい。

### 3. 展覧会の概要

展覧会は武蔵野美術大学美術館の展示室3・4・5およびアトリウム2にて、以下の5部から構成された。

1. 窓の向こう Beyond the Window
2. 紙の上の対話 Conversation on Paper
3. フェイスあるいはマスク Faces or Masks
4. イメージと言葉 Images and Words
5. 遍歴する身体 Wandering Bodies

第1部「窓の向こう」では、写真と細密画を中心に展示された。写真の大部分はスタシスのルーツに関連するものである。14歳の頃にゼニットのカメラを手に入れたスタシスは、自身の故郷であるリトアニアのレプシャイ村の風景、両親、隣人たちの姿を好んで撮影するようになった（挿図2）。現在でもフォトモンタージュなどを駆使した作品制作を続けている。一方の細密画は、スタシスがカーリーニングラードで兵役生活（1974年）を体験したころから描かれ始めた（挿図3、挿図4）。スタシスは、思うように芸術活動が続けられない不満により「形而上学とメタファーの世界に導かれていった」と述べている<sup>5</sup>。

第2部「紙の上の対話」では、スタシスがこれまで自身の記録用に描きためてきた日記帳、スケッチブックなどが展示された。スタシスはカウナスの応用美術学校在学中に皮革デザインを専攻していたこともあり、現在でも特注の革製本のメモ帳を持ち歩くなど、革製品に強いこだわりがある。今回の展覧会では、スタシスがこれらのメモ帳に書き溜めていたデッサンなど、公開を前提とはしていなかったごく私的な作品群も公開された（挿図5）。

第3部「フェイスあるいはマスク」では、スタシスの作品群のなかで頻繁に現れる「顔」を描いた絵画と仮面の作品が展示された（挿図6）。特にパステル画の技法を習得した1984年以降、スタシスは「顔」を描いた絵画作品を多く発表してきた。それらの中には映画や舞台公演のポスターとして採用されたものも多い。一方、スタシスは2003年から2004年のパリ滞在中に仮面の制作をはじめた。パンの包み紙など身近な素材で作られた仮面は、スタシスが監督したその後の舞台作品でも使用されている。

第4部「イメージと言葉」では、リトアニア時代から手がけてきた絵本の挿絵および蔵書票が多数展示された（挿図7）。挿絵画家としてのスタシスにいち早く注目したのは日本の美術関係者である。1984年には、書籍『絵本の世界 110人のイラストレーター』<sup>6</sup>においてスタシスが紹介されている。また、リノカット、エッチング、アクアチントなど、様々な技法で作られた蔵書票はヴィリニユスの美術アカデミー在学中より評価が高く、後にスタシスが国際的に活躍する足がかりとなった。

第5部「遍歴する身体」では、特に2000年代前半にスタシスが撮影した写真作品が展示されると共に、スタシスの舞台作品の映像が上映された。前者の写真作品の特徴は、モデルがすべて仮面を被っている点にある（挿図8、挿図9）。これらの写真作品と通底するのが、1990年代にスタシスが手がけた演劇『白い鹿 Biały jelen』(1993年)と『木の人間 Drewniany człowiek』(2007年)である。スタシスが「両親に捧げた」と語る両作品は、自身の故郷や子供時代をイメージした自伝的なものである（挿図10、挿図11）。特に『白い鹿』の劇中では、スタシスが観客の前で作品を制作する場面もあるというユニークなものである。

#### 4. 総評

2019年は日本・ポーランド国交樹立100周年ということもあり、ポーランドの芸術に関心のある者には嬉しいイベントが多かった。本展覧会の他にも、「ポーランドの映画ポスター」（2019年12月13日～2020年3月8日、国立映画アーカイブ）や「しなやかな闘い——ポーランド女性作家と映像：1970年代から現在へ」（2019年8月14日～2019年10月14日、東京都写真美術館）などの展覧会が開催されている。

本展覧会の特徴は、スタシスというひとりの作家に着目した点にあると言えるだろう。スタシスはすでに国際的な知名度を得ている作家であり、その作品数も膨大なも

のであるが、蔵書票をはじめとして個人所有となっている作品も多い。そのなかで777点の作品群を一挙に鑑賞できる機会は極めて貴重なものであったと言える。

グラフィックデザイナーの田中一光はかつて、スタシスの作風を「リトアニアの土、ワルシャワの風」と評した<sup>7</sup>。この言葉が表すスタシスの二重のアイデンティティもさることながら、新しい表現方法に絶えず意欲的に取り組む点も、スタシスの重要な特徴と言えよう。ヴィリニウスでの学生時代に制作した蔵書票で注目を集めはじめたスタシスであったが、その後のカーニングラードでの兵役生活の中で、細密画の技法とメタファーを駆使した表現を磨いた。初めての来日を果たした1978年以来、筆と墨を使用した絵画も手がけており、2003年から2004年のパリ時代には仮面制作にも着手している。スタシスは旅行鞆を自身の「アイコン」として愛用しているが、自身の人生における変化と技法的なヴァリエーションが融合している点こそ、スタシスの表現の最大の特徴と言えるだろう。

このような表現方法の変遷は決して流行を追いかけたものではなく、創作活動のなかで変化してきたものであり、有機的に結びついている。とはいえ先述のとおり、スタシスは多作な作家であるために、作品群をただ眺めていてもこの結びつきに気づくのは困難である。本展覧会は、スタシスが個人的に書き溜めていたスケッチなども含め、膨大な作品群がスタシスのライフヒストリーと関連付けられながら機能的に整理・解説されていた。スタシスの個展としては、規模はもとより、質としても最上のものであったと言えるだろう。

## 5. 謝辞

本展評の執筆を快諾して下さったスタシス・エイドリゲヴィチウス氏および武蔵野美術大学美術館・図書館の関係者の皆さまに深甚の謝意を表します。ありがとうございました。

## 注

- 1 展覧会公式ウェブサイト:<<https://mauml.musabi.ac.jp/museum/events/15937/>> [最終アクセス: 2020/10/03]
- 2 ジェームス・クリュス (あまぬま はるき [訳]) (1991) 『ながいおはなのハンス』ほるぷ出版
- 3 クルト・バウマン (斉藤洋 [訳]) (1991) 『ながぐつをはいたねこ』ほるぷ出版
- 4 スタシス・エイドリゲヴィチウス、田中一光 (1998) 『スタシス・エイドリゲヴィチウス』(スリージブックス 世界のグラフィックデザインシリーズ 34) トランスアート
- 5 Kuc, Monika (2010) *Stasys 60*. Warszawa: ABE Dom wydawniczy, p. 109.
- 6 堀内誠一 [編] (1984) 『絵本の世界 110人のイラストレーター』福音館書店

「スタシス・エイドリゲヴィチウス イメージ——記憶の表象」展



【挿図 1】

展覧会公式ポスター

展覧会公式ウェブサイトより



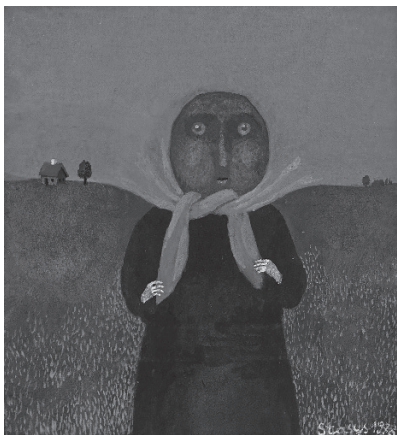
【挿図 2】

「父と母」1970年

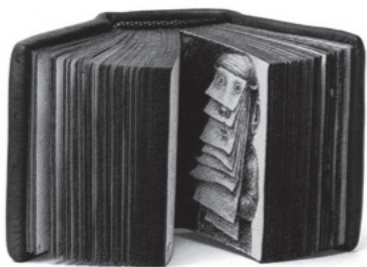
展覧会図録 p. 42



【挿図3】  
「鞆」1977年  
展覧会図録 p. 86



【挿図4】  
「空」1978年  
展覧会図録 p. 89



【挿図5】  
スケッチブック 1978-79年  
展覧会図録 p. 174



【挿図 6】

左上「詩人の眠り」2003年  
左下「ヤドヴィガ」2003年  
右上「コーヒー」2003年  
右下「分かれ道」2003年  
展覧会図録 p. 255



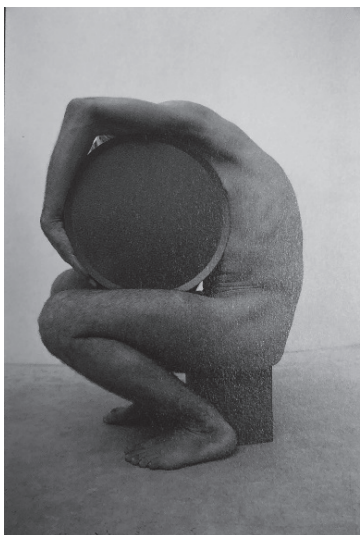
【挿図 7】

「Ex libris Genutes Eidrigevičiūtes」1976年  
展覧会図録 p. 372



【挿図 8】

「ダブルブラック」2002年  
展覧会図録 p. 441



【挿図 9】

「金属の太陽」2006年  
展覧会図録 p. 443



【挿図 10】

『白い鹿』の舞台上でスタシスが描いた作品  
Kuc, Monika (2010) *Stasys 60*. Warszawa: ABE  
Dom wydawniczy, p. 30.



【挿図 11】

『木の人間』の一場面  
Kuc, Monika (2010) *Stasys 60*. Warszawa: ABE  
Dom wydawniczy, p. 31.